

# 熊野・二木島の唐人墓

松 浦 章

『角川日本地名大辞典 24 三重県』（角川書店、1983年6月）熊野市、二木島（にぎしま）町の項目に、

二木島は古来陸路・海路の要所であったので、二木島の一里塚（県史跡）・キリシタン灯籠・唐人塚などが残り、鯨の供養碑（県民俗文化財）もある。（1205頁）とある。特に「唐人塚」に引かれ二木島を尋ねた。二木島は北は尾鷲市と接する漁港である。JR紀勢線の二木島駅で下車して徒歩数分のところに唐人塚があった。同地には熊野市の史跡指定の標識が立てられていた（写真① 熊野市指定文化財）。

## 熊野市指定文化財

### 史跡 陳雲漳の墓

陳雲漳は清国の臣、商船得泰号の乗員として、文政八年（一九二五）末、通商のため長崎への航行中、暴風雨で遠州吉田村に漂着、翌三月上旬幕命により長崎へ

護送の途中下り潮強きため、二木島浦に寄港、滞在中、陳氏は病のため死亡、同浦に埋葬された。出帆にさいし碑文と費用を預り、墓石建つや、これに寄せる浦人の崇敬は、恰もわが国の神佛に対するがごとく、度重なる、戦争中も、この墓前には香華のたえまがなく、美しい国際美談と云える。

指定 昭和四十四年七月十七日  
熊野市教育委員会

唐人塚と呼称されていたのは、文政八年の西八番船に番立された中国の対日貿易船であった得泰船の重組員の陳雲漳の墓であった。

碑文の形状は図1のようなものである。道光丙戌年は同六年、文政九年に当る。

文政九年（1826）正月に静岡県の手原郡下吉田村住吉、大井川河口左岸に当る地に、中国から長崎に向かうはずであった貿易船得泰船が漂



写真① 熊野市指定文化財



写真② 陳雲漳の墓



写真③ 二木島湾

着した。同地での入港が困難のため曳航されて清水港に入港した。その後、長崎への送還されることになり、その途中の熊野・二木島において陳雲漳が没したのであった。得泰船の記録によれば、文政九年三月二十七日にその時の様子が記されている。田中謙二氏の訳によれば、得泰船の財副劉聖孚が「本船の目侶陳雲漳儀、久しく病床にありましたが、薬石效なく、ただいま寅の刻（午前三時一五時）に身まかりました。注文として棺ならびに用品一切の給付をお願いいたしたく、別紙書きつけを高覧に供します。さらに、この浦の古寺の裏に埋葬いたしたく、かつ上陸して葬送りすべき唐人二名も、別に各簿を用意して申請つかまつります。」と述べている。そして葬られる寺は、護送の世話役として同乗している野田笛浦が「二木が浦、海福山最明寺と申し、禪宗です」と答えているように、

二木島町の曹洞宗最明寺に葬られた（田中謙二氏、松浦章編著『文政九年遠州漂着得泰船資料—江戸時代漂着唐船資料二—』関西大学出版部、1986年3月、468～469頁）。

陳雲漳の墓がある地は二木島町小向、向月庵境内である（『熊野市文化財』熊野市教育委員会、1990年3月、31頁）。海岸に沿って走る国道311号の横にある。

陳雲漳の墓石には図1のような文面があるが、それは得泰船の記録にも見え、原案は得泰船の財副朱柳橋が書いたものに、野田笛浦が「佳域」を加えたもので、現在の碑と同じである。墓には陳雲漳の墓誌銘は見えず、先に紹介した『今世名家文鈔』巻八に野田笛浦が記したものが知られる（『文政九年遠州漂着得泰船資料』350頁）。墓誌銘によると「雲漳」は号であり、その系譜は次の図2のようなになる。

二木島町は人口八百余人の農漁村地域で、二木島湾は南側の太平洋から見て西に深く湾があるため、JR二木島駅や、陳雲漳の墓がある地から直接に太平洋を眺めることができない。そのため湾内は穏やかで養殖筏が幾つも見られた（写真③ 二木島湾）。異国の地で没した陳雲漳の墓には熊野市の史跡標識にあるように今も地元の人々によって香華が供えられていた。

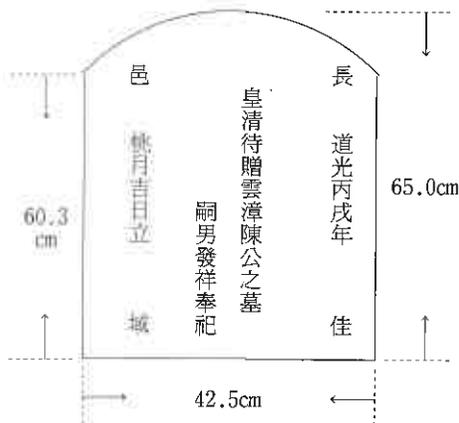


図1 陳雲漳の墓石碑文

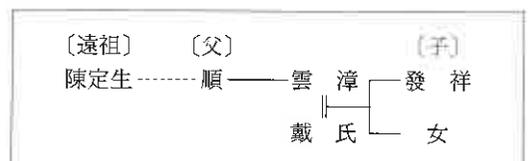


図2 陳雲漳系譜